

北星学園女子短期大学に於ける英語による 一般教育の学生評価に関する考察

Approaches to Evaluation in EFL Content-Based Courses at Hokusei Women's Junior College

ロバート E. ゲティングス、岩崎・グッドマン まさみ

Robert E. Gettings and Masami Iwasaki-Goodman

ABSTRACT

In 1994, Hokusei Junior College began a new content based EFL (English as a Foreign Language) curriculum, in addition to the traditional Bible classes. The teachers of these classes reviewed the various aspects of the new curriculum and agreed that student evaluation constituted an important part of the ongoing process of curriculum development. In December 1994, all students were asked to evaluate content based EFL classes. The evaluation results clearly pointed out some positive aspects of the curriculum and some aspects that required reconsideration. An effort to improve the curriculum in the following year was made based on the suggestions proposed by the students. This paper first introduces the results of the students evaluation. It further describes the attempt made by the teachers of History and Sociology to use the students evaluation for curriculum improvement.

Key words: evaluation, content-based courses, EFL, curriculum development, post-secondary education

1 はじめに

1889年に北星学園女子短期大学がアメリカ人の伝道師のよって創立されて以来、本校ではイングリッシュ・バイブル・クラスにみられる英語による一般教育が行われてきた。1994年、北星学園女子短期大学では新たに英語による一般教育プログラムを拡大し、2年生の

学生は英語による一般教育科目のうち3クラスを選択する事となった。初年度は心理学、社会学、歴史が開講された。その他に必修科目としてイングリッシュ・バイブルⅠとⅡ、選択科目として比較文化がそれぞれ開講された。

英語による一般教育プログラムは教科書と講

義を中心とし、1週各90分の授業が年間約25週にわたり展開される。各クラスの学生数は約50人であり、短期大学在学2年目の女子学生、年齢19才から20才である。授業を担当する教員はそれぞれの分野において専門知識を習得した者であり、さらに外国語としての英語教育の経験を持つ者である。

英語による一般教育プログラムの初年度終了時（1994年末）には、各クラス担当教員により授業の進行状況や全体評価、さらに問題点などについての総括的なまとめが行われた（アリソン、他 1994）。その結果、本プログラムをより効果の高いものに改善して行くためには学生からのフィードバックが不可欠である事が指摘された。大学の教育課程の体系的な自己点検・評価の必要性は既に青木（1992年）により明らかにされている。さらに英語による一般教育プログラムに於ける学生評価の重要性は Brinton et al. (1989) が述べている。本プログラム担当の教員は学生からのフィードバックを組織的にプログラムに組み込んでいく試みとして、1994年12月に英語による一般教育科目を履修する200人の学生を対象に学生評価を実施した。その結果は1995年度の授業計画の中で活かされ、本プログラムを改善する努力の第一ステップが踏み出された。

2 学生によるプログラム評価の実施

学生によるクラス評価では、大きく3分野の質問を行った：1) 英語による一般教育科目と他の英語の授業との比較、2) 本プログラムで学んだと思う事、3) 各クラスにおいて良い点と改善を要する点。学生から自由で正直な評価を引き出すために、質問は日本語で行い、また学生は日本語で答えた。さらに同

様の理由で、答えは5段階の選択肢から選ぶ形式ではなく、学生が意見を自由に書く形式を取った。1994年12月第2週目の歴史のクラスにおいて、学生評価を実施し、その結果は2人の個別の調査員が集計した。それぞれの調査員は学生が書いた評価を読み、第一にその答えに見られるパターンを明らかにした。さらにそのパターンをもとに、各項目に当てはまる意見を数値的に分析して行った。パターンに当てはまらない意見は別紙に記録された。学生が複数の意見を述べた場合はそのいずれも記録した。ほとんどの学生が質問に答えており、英語による一般教育プログラムの全般的な質問に対して、無回答だった学生は全解答約200中11であった。

3 学生評価の結果

それぞれの質問に対して以下のような意見が見られた。下線部分は学生評価の用紙に用いられた文章である。

A 今学期受けた他の英語のクラスと比較して、これらのクラスは難しかった/やさしかった/楽しかった/つまらなかった/ためになった/その他。

全般的に：

難しいと答えた学生が115人
 ためになったと答えた学生が85人
 おもしろかったと答えた学生が16人
 つまらなかったと答えた学生が7人

講義：

難しいと答えた学生が84人
 ためになったと答えた学生が52人
 おもしろかったと答えた学生が29人
 つまらなかったと答えた学生が11人
 解り易かったと答えた学生が17人

教科書：

多くの学生（174人のうち77人）が社会学の教科書に関してのみコメントを書いている。他のクラスでは主にプリントやコンピューターを用いている。10人の学生が肯定的なコメントを書いたが、そのうちの6人は心理学の授業で使われているコンピューターを用いたテキストやプリントをあげている。

難しかったと答えた学生が77人
無駄だったと答えた学生が63人
高価すぎると答えた学生が14人
良かったと答えた学生が10人

テスト：

一般的に難しかったと答えた学生が40人
特定のテスト、あるいは特定のクラスのテストが難しいと答えた学生が62人
普通と答えた学生は28人

予習／課題

この項目のコメントには特徴的なパターンが見られ、歴史に関してのみコメントをしている学生が多く見られた（177人のうち60人）。

歴史に関して課題が多すぎて辛いと答えた学生は60人
その他のクラスに関して課題が多すぎると答えた学生は39人
難しいと答えた学生は21人
ためになったと答えた学生が22人

B 今学期受けた他の英語のクラスと比較して、これらのクラスで特に学んだと思う事はどのような事ですか？

「聞く力」と答えた人が104人、「書く

力」と答えた人が32人いた。

その他に「異なった見方」と答えた人が19人、「外国人の考え方や文化」と答えた人が17人、「英語の理解力」と答えた人が15人いた。

C これらのクラスが始まった4月の頃と比べると、あなたの英語力はどれくらい上がったと思いますか？

学生の多くは英語による一般教育の授業を通して、聞く力と書く力が上がったと考えている。また読む力が上がったと考える学生もいるが、話す力についてはほとんど上がっていないと考えている。これは授業形態が講義とレポート提出が中心である事の反映である。

上がった 変化なし 下がった

<u>聞く力</u>	161	5	2
<u>書く力</u>	153	7	3
<u>読む力</u>	94	70	4
<u>話す力</u>	21	123	16

D これらのクラスに関して良いと思った事と改善したら良いと思う事を一つずつあげてください。

各クラスに関する様々なコメントが書かれたが、特に多かった意見を上げると、以下のようである。

良いと思った事：

グループリサーチがおもしろかった
講義の内容がためになった
講義で用いられた英語が解かり易かった

先生の説明がていねいだった。

ビデオを使った事は良かった。

改善したら良いと思う事：
テキストが難しい
宿題や課題が多すぎる
講義が難しい

E これまでに高校や中学などでは歴史や社会学、心理学、比較文化を少しでも勉強した事があると思います。一部の学生はこれまでに聖書の勉強もした事と思います。その時に学んだ内容と比較して、これらのクラスではどれくらい新しい事を学びましたか。

多様な意見が書かれたが、その中でも多かったのは下記の意見であった。

いろいろな知識を学んだ
多様な視点、新しい視点を学んだ
英語で学んだ事に意義があった

4 学生評価の成果

英語による一般教育の授業を充実させていくためには、学生の授業評価の結果を次年度の授業計画に活かしていく事は不可欠である。初年度の試みとして社会学と歴史の授業の中で学生の評価を活かして授業内容が改善された例を上げる。

歴史の試み

学生評価の中で歴史のクラスを評価する項目では41人の学生が書く力が向上したと答え、15人の学生が授業の内容が良かった、11人が宿題が良かった、さらに8人の学生が歴史に於ける様々な視点が学べた事が良かったと答えている。一方改善した方が良いと思う点として、79人の学生が難しい宿題が多すぎたと

答え、15人の学生が講義の流れについていくのが難しかった、さらに9人の学生がコンピューターを使う事に手間取った、オーバーヘッドに書かれている事を書き写す時間が足りなかったと答えている。

他の項目では60人の学生が「つらい」科目として歴史を特に上げている。歴史の課題が多かった事により、学生が多くの学習時間をそれについやした。さらに、英語による一般教育のクラスは一般的に1年次のクラスに比較して学習時間が多く必要である事が指摘されている。他のクラスに必要な学習時間と比較すると、歴史のクラスにかかる学習時間は明らかにバランスを欠いている。

歴史担当教員は課題を少なくする事によりカリキュラムを改善する努力を行った。一方課題に対して積極的な学生に対してリサーチの方法を学ぶ機会や書く力を向上させるために必要な課題を十分に与える事にも配慮した。初年度はクラスの単位を得るためにはすべてのプロジェクトを終了しなければならなかったが、1995年度には学生にプロジェクトやリーディングやライティングの課題を選択させる機会を与えた。各課題で得られる点数を提示し、学生はプロジェクト計画を立て、それにより成績を決定する事とした。成績が60点で満足出来る学生は最低量の課題をこなし、またあるレベルの語学力（読み、書き、聞き取り）、さらに講義内容の理解の向上を求める学生はその目標を達成するために必要な課題に取り組む事とした。

社会学の試み

学生によるクラス評価の結果、改善を必要とする項目として際だっているのが教科書のレ

ベルが高すぎる事、さらに講義が難しいという事であった。初年度は北米の大学の社会学で入門レベルのテキストとして用いられている本を本校の英語による社会学のクラスのテキストとして使用したが、明らかに学生の英語力には及ばないものであった。テキストが難しかった事により、講義内容を補足すべきリーディング教材の効果が弱くなってしまった事が明らかになった。

社会学の担当教員は1995年度の授業計画で主に3つのポイントを改善した：1) 北米の大学用テキストの中で、学生のレベルに近い物を選択する、2) テキストを読む要領を指導する、3) オーバーヘッドでテキストの各チャプターのアウトラインを示す。英語による社会学のテキストとして J. H. Turner 著による "Sociology : Concept and Uses (McGraw-Hill, Inc. 1994)" を選び、講義内容をできる限りテキストで紹介されている内容に限定した。さらに授業の中で各パラグラフのトピック・センテンスにマーカーで印をつけさせる事により、要点を捉えて読む事が出来るように指導した。また講義の流れを復習する目的で、オーバーヘッドを使ってテキストの各チャプターのアウトラインを示した。つまり各時間に学習する内容が、講義を聞く事、テキストを読む事、オーバーヘッドのアウトラインを書き写す事の3つの作業を通してインプットされる形式とした。各チャプターが終わると小テストを行い、講義内容の定着度を確認しながら授業を進め、内容の理解度が低いチャプターについては、テストを再度受ける事を可能とし、講義内容の理解を促した。

5 まとめ

英語による一般教育の授業を学生が評価す

る事により、学生自身が担当教員に対してクラスの感想を伝える機会が出来た事は良い事である。また学生の評価は教員にとっても有益であり、教員が普段のクラスの中で気づいている事や学生から聞いている意見等を再確認する機会ともなった。今回は5段階選択の形式を用いず、筆記式の形式を用いて自由な意見を書く事を促した。歴史と社会学の例に見られるように、担当教員が次年度の授業計画を立てる上で、学生による評価が大きな役割を果たしている。つまり学生の評価が英語による一般教育プログラムをより効果的に改善していく上で非常に良い効果があると言える。

将来に於いて、本校の英語による一般教育の不可欠な要素として学生評価を継続していく計画である。初年度の学生による評価では質問の量が多い事、学生数が多い事、また教員の中には結果を英語に翻訳しなければ理解できない人もいる事などから、結果を集計する事に時間を要した。今年度の英語による一般教育クラスが終わりに近づいているが、担当教員の意見を参考にしてさらに評価の中で用いる質問を見直し、さらに学生評価の結果を集計する過程を効率良く進めるために、コンピューターを用いるなどの方法を模索している。

参考文献

- 青木宗也、他(1992年)組織的・体系的な自己点検・評価 エイディ研究所
 Briton, Donna, Snow, Marguerite and Wesche, Marjorie, (1989) Content-Based Second Language Instruction. Heinle & Heinle Publishers, Boston.